

せつなものである。感情の変化ははげしく表面にあらわすのでわかりよい。

(四) 交友及び構成の変化

・六～七月、消積木の場での友達がきまりバラバラでも関係つけて遊ぶようにする。グループ以外の子が入ると遊びはこわれてしまう。(持時十五分×交友一三人)(積作るとこまでいかずざわわっている位、特定の友達なし)

・九～十一月消積非常に熱中、目的を持って活動し動くものを好んで作る(積は消に刺戟され遊ぶようにするがうまく遊べない)。

・十二月(かるいことばの刺戟をあたえる)(消あそべなくなる子、発展し交りもつよくなる子がいる。積木以外のものもつかうようになった。(積考えずケンカが多く発展しない。粗ぼうになる。)

一～三月 人数の制限、作るもの課題、積木の制限をする(消いやがる子、ずるい子、ケンカする子、よろこぶ子などがみられる。(積ケンカになり遊びは発展しにくい。考えず人をたよるが二月頃頃から消のリーダーに教えられしげきをよろこぶようになった。)

〈考察〉

・学令前一年の幼児は積木遊びにおいて消極積極共に始めはにげだしたりあらそいになったりするが適度の刺戟ならよろこんで受取り、交友も多くふかく遊びも発展する。

・刺戟をあたえることにより、積木以外の場でもしっかりした交友関係が結ばれるようになった。

・消積立的で他人を知ろうとしない子、場に入っていけない子は、作るたのしさと共に交るたのしさを、よろこびを知ることができた。積消的であらそいが多くなげやりであったが落ついて考えて仕事

をし、ケンカもなくなったのしく交れるようになった。

自然発生の遊びの時や平常ではみせない姿をみせてくれるので指導のよい手がかりになる。これらの効果ある積木遊びを正しくみまもり適度に刺戟することによってより良い社会性をのばす場として用いたいと思う。

幼児の科学技術教育

広島 大学

沖 原 豊

広島・古田幼稚園

伊 達 好

科学技術教育は幼児期からその基礎を正しく築いていかなければならない。

幼児期における科学教育が、一般に低学年の理科観察にのみ止まっていたはならない。観察も十分必要であるが、頭と手を同時に使って、理論と同時に実際を伴わせなければならない。

これには科学技術による一年間のカリキュラムを立て、これに従って順次道具に対する正しい認識と、道具に対しての抵抗を感じなくなるように次第に指導していかねばならない。幼児が道具を使って実際に出来るかどうか、どの範囲まで道具が使えるか、また実際に使ってみて、道具に対して更に視野を広く道具に対して、意見を深めさせるべきである。これらの指導法は幼稚園においてのみならず

られるものでなく、日常生活に科学的な諸経験を實際に活用出来るよう、家庭の協力も同時に望むべきであつて、この協力がなければ科学技術教育において男女の差が出来やすい。また社会生活環境にも影響される。

科学技術教育は頭の働きがすなわち手の働きとなるよう体育のことも忘れてはならない。知的発達と同時に運動神経も十分発達するよう、常に音感とリズム感と共に体の調整を考えなければならぬ。以上のことを考へて保育した結果、短い経験ではあるが、幼稚園での仕事に対して興味を持たなかつた子どもが、道具を自由に使用製作することによって仕事に興味をもち、種々な材料を使って製作すると同時に種々な道具類の修理も進んでするようになった。また女児も男児と共に道具をよるこんで使うようになり平面的な製作から立体的なものを楽しんで作るようになった。また運動神経の発達と体育の為に、音感やリズム感も考へて指導した結果、今までに見出せなかつた幼児の個性が非常にはつきりして個性教育にもたいへん役立つ良い結果であつたと思う。

胎教の自然科学的基礎 についての検討

近江学園

田中昌人

教育思想史的にみると胎教の概念はそれ自体が転換期を迎えているのであるが、それを考察する一契機として自然科学的検討の問題をとりあげ、問題の所在と問題展開の方向を示したい。

一、妊娠時の外因が産児の発達にいかなる効果を及ぼすかという問題をとりあげたものには精神分析学・精神身体医学・発達心理学・小児科学・実験発生学の知見があるが、それらを検討することにより、問題は胎生期条件変化の発達効果性という問題領域のものとして、原因の実験発達心理学の立場から、発達過程の観点のもとにとりあげられていかねばならないということが指摘できる。

二、しかもこの場合の外因は機能異常の生成といつた彷徨変異の由来を明らかにしようとするのであるが、その場合にも器質的欠陥がその根底に把握されやすいものから取上げられねばならないのであつて、現段階における精神分析学精神身体医学的アプローチには方法的限界が認められる。現在必要性と実施可能性が高く、しかも結果によっては従来の見解に新しい意味を与えるのではないかとみられる研究課題は、妊娠初期にウィールス性疾患に罹患した妊婦より生れたものの知的発達様相を新しい発達の知能観から把握し、同胞との発達過程的段階差から二重比較的にみていく研究である。

三、なお、残統効果の判定は発達過程的になされていかねばならないが、その際の心理構造は発達障害における極性化過程の検討としてとりだされる局面からみていかねばならない。測定結果及び過程の内容分析、心理機能培養法の併用が要請される所以である。

以上、問題展開の方向を示す努力をしたがこれを勇気づけてくれるのは細菌のみならず鳥類において得られた定向変異形成の資料である。